

経営協議会（平成 19 年度第 2 回）議事要旨

1. 日 時 平成 19 年 11 月 7 日（水）14:00～16:18
2. 場 所 事務局 3 階会議室
3. 出席者 安田学長（議長）
千原理事、小笠原理事、五十嵐理事、村井理事、
井上委員、佐々木委員、中村委員、CASSIM 委員
- 欠席者 森下委員
- 陪席者 佐藤教育研究支援部長、宗近経営企画部長、長川企画総務課長、中條
学生課長、奥田研究協力課長、大野学術情報課長、河野会計課長、向
井施設課長、小西人事課課長補佐、大下企画総務課課長補佐、辰巳企
画総務課課長補佐、石井企画総務課秘書係長、松山企画総務課企画・
法規係長、小野企画総務課企画・法規係主任

（配付資料一覧）

1. 経営協議会（平成 19 年度第 1 回）議事要旨（案）
- 2 - 1. 経営協議会（平成 19 年 6 月 20 日）委員の意見
～ 学生確保のための方策について(国際化を含む)～
- 2 - 2. 大学院教育の組織化と国際化に向けた取組み
- 3 - 1. 経済財政改革の基本方針 2007
～ 「美しい国」へのシナリオ～（抜粋）
- 3 - 2. 社会総がかりで教育再生を
～ 公教育再生に向けた更なる一歩と「新教育時代」のための基盤の再構築～
- 第二次報告 -（抜粋）
- 3 - 3. 大学院教育振興施策要綱の概要
- 3 - 4. 国立大学の再編・統合の状況
- 3 - 5. 18 歳人口及び高等教育機関への入学者数・進学率等の推移
4. 平成 18 年度に係る業務の実績に関する評価の結果について
5. 平成 18 事業年度財務諸表の承認について
6. 平成 20 年度概算要求の概要について
7. 平成 19 年度外部資金の受入れについて

議事に先立ち、議長より前回欠席の佐々木委員及び千原委員の紹介が行われ、引き続いて事務局から配付資料の確認が行われた。

4. 議 事

（前回議事要旨の確認）

「経営協議会(平成 19 年度第 1 回)議事要旨（案）」について、原案どおり承認された。

（報告事項）

（1）平成 18 年度に係る業務の実績に関する評価の結果について

五十嵐理事から、各項目とも「中期目標・中期計画の達成に向けて順調に進んで

いる」という評定結果が国立大学法人評価委員会委員長から通知された旨の報告が行われた。

また、「国立大学法人・大学共同利用機関法人の平成 18 年度に係る業務の実績に関する評価について」等の資料に基づき、評価結果の全体概要及び他大学の改革推進状況についても説明が行われた。

(2) 平成 18 事業年度財務諸表の承認について

五十嵐理事から、平成 19 年 9 月 11 日に文部科学大臣による承認を受けた旨の報告があった。また、他大学と比較した財務指標について、併せて説明が行われた。

(3) 平成 20 年度概算要求の概要について

五十嵐理事から、配付資料に基づき、報告が行われた。また、「国立大学法人の財務等に関する説明会（平成 19 年 9 月 19 日開催）」で配付された資料についても併せて報告が行われた。

(4) 平成 19 年度外部資金の受入れについて

千原理事から、配付資料に基づき、報告が行われた。

(審議事項)

(1) 学生確保のための方策について

(2) 大学院教育の実質化、国際的な通用性・信頼性、戦略的な大学連携等について

議長から、経済財政改革の基本方針及び教育再生会議での提言等を踏まえ、本学の今後の大学院教育の実質化、国際的な通用性・信頼性等をどのように転換していけば良いか、ご意見を賜りたい旨の発言があった。続いて議長から、前回に引き続き、「学生確保のための方策について」ご意見を賜りたい旨の発言があった。

(委員からの主な意見は次のとおり)

・競争的資金に応募した結果が不採択であったとしても、応募するという奈良先端大の前向きな姿勢は、今後、絶対に必要である。

・各研究科の連携協力の相手先が限定されている感じがするので、幅広く実施できるような体制を検討してはどうか。

・日本の若い研究者養成を国際的に展開するためには、大学同士が連携し合い、シナジー効果を高める必要がある。

・奈良先端大で得意とするものを積極的に伸ばしていくことが基本的には必要であり、それが国全体から見ても大事なことだと思う。そういう強みをさらに高めていくためには、近隣の大学、研究所及び企業等と恒常的に教育研究を連携していく仕組みを検討する必要がある。

・奈良先端大は大学院大学なので、大学院生が学びやすい環境をどう作っていくかということが課題になってくる。ある大学では博士課程の授業料引き上げを行

わなかった。そういう授業料免除や奨学金支給のような生活面での支援、あるいはアシスタントティーチャーのような学習面の充実等、今後、大学院生に対して、どのような支援ができるのかが、大学の魅力になっていくのではないかと。

・真のグローバル化とは、日本の考え方を国外に出していくことである。日本文化を味わえる奈良という土地をもっと活用すべきである。日本社会を知った上で母国に帰国し、日本をどれだけ母国で宣伝してくれるかということが、すごく大事である。奈良先端大の学生確保を推進するためにも奈良の魅力ある土地をもっと活用してはどうか。

・奈良先端大に独自性を持たせるために、海外の大学とどう組んでいくかが重要である。また、大学院を持っていない大学や修士課程までしかない大学から成績の良い学生を奈良先端大に引っ張ってくる連携の仕組みは考えられないか。

・奈良先端大は学問の序列がないので、何でもできるのではないかと。言い換えれば、奈良先端大は大学院のみの大学であり、基礎教育より研究に重点を置いているため、企業との連携協力も非常に取りやすいのではないかと。これは非常に強みである。そういう意味では、日本企業にとどまらず海外の企業も含めて何らかの施策を考えてみてはどうか。

・今、社会で必要な力は、様々な課題に直面した際、色々な手を尽くして課題を解決するという力である。そういう力は別に学部卒だろうと大学院卒であろうと関係ない。そういう総合的な力量、判断力等をどうやって大学で身につけさせるかを考える必要がある。

・社会科学、人文科学、あるいは自然科学といった総合的なテーマについて、教員と学生が一緒になって論じ合える機会を大学内に作り、人材を育てていくことが重要ではないか。

・「人を育てる」ということは、とても大事だと思うし、最後はやっぱり「人」だと思う。良い仕事をしている人をずっと見てみると、必ず高等学校から大学時代に良い先生や良い本に巡り合っている。そういうことを考えると、もう少し先生の魅力を打ち出す必要があるのではないかと。最後は結局、奈良先端大にいる人達の魅力だと思う。あの教員のもとで学びたいとか、そういう形を構築していく必要がある。

・どういう課題でも良いが、その課題についてうまく学生と複数の教員が論じ合うような授業科目を作っていくことが大事である。それによって総合的に物事を見る力、判断する力が養える。今後はそういう力をきちんと主張できる人を育てる努力が必要である。

(その他)

議長より、次回経営協議会は平成 20 年 1 月 23 日(水)に開催予定であることが述べられた。

以上